
バリアブル・アート過去編 第一章

柳沢紀雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バリアブル・アート過去編 第一章

【Nコード】

N9539E

【作者名】

柳沢紀雪

【あらすじ】

それは全てが始まる僅かに過去の話。それは少年少女達が過酷な現実に戦いを挑む15年もの昔に遡る。両親を失った少女、朱鷺守七葉はその悲しみを日常に埋没させることで何とか耐えることが出来ていた。生きる意味を失い、ただ無意味な日々を過ごすばかりの彼女の心はいつしか空虚になっていつてしまっていた。そんな中、彼女は一人の青年と出会うこととなる。この世界の人間ではない、別の時空からやってきたという彼に七葉は何故か心引かれるようになる。そして、それは彼女にとって過酷な運命の始まりともなった。

ファンタジーを名乗りつつもSFの設定と要素をふんだんに盛り込んだサイエンティック・ファンタジー。

(1) (前書き)

バリアブル・アート本編では裏方となる朱鷺守七葉の物語。

「失いたくないものがあつた。だから、私はそれを守ろうとした。ただ、それだけのことだつた。」

微睡みと現実の間を行き来していた意識を呼び覚ましたのは、しとしと降り注ぐ雨音だつた。少女は、閉ざしていたまぶたを開き、静寂に満たされた。

眠っていたのかもしれない、少しばかり固まってしまつた身体を解きほぐすには少しばかり時間がかつたことから、数刻といったところか。

少女は惚けていた意識をはっきりさせようと何度か深呼吸を繰り返すとゆつたりとした動作で立ち上がった。

障子を開けると、まだ朝日の昇らない暁の闇に染まつた庭とひっそりと立つ古い道場、そして彼女が慣れ親しんできた閉ざされた生け垣が切り取る、薄ぼやけた曇り空が細い霧雨の中にたたずんでいるばかりだつた。

「冷たい雨・・・ね。」

少女の口から紡ぎ出されたつぶやきは酷く曖昧な薄明かりの空へと消えていった。

早朝に降つた雨は数刻で身を潜め、雲間から注ぐ朝日と共に街は眠りから目を覚ました。薄い雲はそよ風と共に去り、少女が家が出る頃には透き通るような青空が僅かな筋雲をまとい、とても穏やかな一日を予感させた。

少女・ときのかみ朱鷺守七葉ななはは登校後、何をすることもなく席について窓の向こう側の空を眺めていた。朝が早く、その分登校する時間も普通より早い彼女は大抵一番に教室に入る。

登校から既に数十分が経過した今となつては、教室の中も幾らか

の喧噪が広がってはいるが、それでも彼女に声を掛けようとするものを伺うことはできない。

それも無理はない。彼女の特定の親友以外のものであれば、彼女の出身を知れば近づきがたく思ってしまうことはよく理解できる。

「おはよう、七葉。」

「おはよう、朱鷺守。」

自分の名前を呼ぶ声に七葉は空から意識を戻した。

「おはようございます。杏奈、都子。今朝もいい天気ですね。」

七葉は唯一の親友に笑顔で答えた。

「あんた相変わらず早いわね。もう少し家で寝てたいって思わないわけ？」

まだ眠そうな眼を擦りながら、都子・八十場都子は呆れつつも感心したような視線を七葉に向ける。

「そうね。時々寝坊をしたくなることはあるけれど、家にいてもすることがないから。」

七葉の少し寂しそうな雰囲気を感じたもう片方の少女、千川杏奈は、無表情に都子の脇を突いた。

「……ん！（何よ？）」

いきなりの視線に眉をひそめた？子は、杏奈を睨もつとするが彼女の訴えかけるような視線に自分の浅はかな言動を咎められたことに気づいた。

「それにしても、初夏にしては涼しい日が続くわね。」

杏奈はそんな都子の視線を受け流しつつ袖を擦った。七葉はいきなり変わってしまった話題を不思議に思いながら、「ええ、そうね。」と受け返した。

話の逸らし方が少し苦しかったかもしれない、杏奈はそう思いつつも逸らしてしまった以上はこの話題を保とうと思った。七葉の家の話題に関しては扱いが難しい、特にその事情を知る杏奈としては藪をつついて蛇を出すようなことはなんとしても避けたかったこともある。

都子は少しデリカシーに欠ける、杏奈はいつもそう思っていたが、都子のそういう物事をシンプルというよりはあまり物事にとらわれないスタンスを少しうらやましく思うこともあった。

おそらく、七葉にしてみれば、自分のことで過ぎたことを他人に気を遣われるのはあまり好ましく思わないのであろうが、杏奈にはそこまで割り切って考えることがまだ出来ない。

（我ながら不器用なことね。）

都子の馬鹿笑いに乗じて、彼女は自嘲的な笑みを浮かべる。二人に気取られていないことを杏奈は切に願った。

学校の生活は緩急があつて気持ちに整理をつけやすい。10分程度の休み時間を挟んで午後の2コマが終了した頃には杏奈の憂鬱は殆ど消え去っていた。

「七葉ー、お昼にしよう！」

スピーカーから鳴り響く昼休みの到来を告げるベルの音を聞くやいなや、都子は早速弁当を持って七葉の元に駆け込んできた。

「えーっと、その・・・、少し気が早いと思うのだけれど・・・。」

思い立ったら一直線とばかりに周りを見ずに行動する都子に、七葉は苦笑を浮かべながら周りを見回した。

「え？」

何のことやら分からないと思いつつも、それにつられて周りを見回した都子だったが、教壇で彼女をにらみつけている教師の顔を見ると、確かに気が早すぎたことを悟った。

「八十場・・・お前なあ・・・。確かにチャイムはなったが、俺はまだ授業が終わったとは言っていないのだが・・・。」

その顔は、怒りと呆れ、後は彼女では仕方がないという諦めを含んだ、少しばかり複雑で奥ゆかしい表情のように七葉の目には映った。

「えーっと・・・ははは・・・。いや、その・・・。ごめんなさい・・・。」

都子の情けない声に沈黙を守っていた教室に爆笑の渦が巻き起った。

「まあいい。授業を終了する。号令は結構だ。」

教師はそういうと教材をまとめて教室を後にした。

「あつちやー・・・後で怒られるかな。」

頭を抱え込む都子を見て、七葉も失礼と思いつつもクスクスと笑い声を漏らした。

「多分、大丈夫だと思うよ。先生、怒っていなかったから。」

七葉は教室を出る間際の教師の表情を知っていた。表情こそ硬かったが、その口元は僅かにほころんでいた。教師という立場上杏奈を咎めなければならぬとはいえ、都子のそういう子供らしい朗らかさを彼もほほえましく思っていたのだろう。

「それにしても都子は落ち着きがない。私たちも来年からは中学生になるのだから、少しは落ち着きを覚えた方が良いわね。」

彼女に苦言を呈するのはいつでも杏奈の役目だった。

「それはあたしも自覚してるけど・・・あなたに言われると何故かむかつくのよね。」

「そう？だったら七葉の方から言ってもらえるかしら？」

いきなり自分に水が向けられて七葉は「えっ？」と困惑したが、杏奈の視線にはあらがいがたいもを感じ、ここは彼女に従っておいた方が良く感じた。

「えーっと。もう少し落ち着いた方が良くいよ？都子。」

「どうかしら？」

勝ち誇ったような杏奈に都子は更に気を悪くしたが、七葉に言われると何故か自分が悪いような気になってしまって反論が出来ない。

「あー！もうー！あたしがいつたいなにした！」

だから、彼女に出来ることは負け犬のように吠えること以外に残されていなかった。

「ああああ、都子。ごめんなさい、ごめんなさい。」

ある意味拍手を送りたくなるような都子の錯乱ぶりに、七葉も混

乱してしまっ。

「七葉が悪いんじゃないの。悪いのはこいつ（杏奈）！」

といいつつ、ビシッと指さす都子の手を軽く払いのけながら杏奈は涼しい顔を崩さなかった。

「そうね、私が悪いのよ。さあ、無駄話はここまでにしてさっさとお昼にしましょう。午後の一つ目は体育だからあまり時間が無いわ。」

ここまで見事にいなされてしまえば、さすがの都子も完敗を自覚せずをえなかった。

都子にとっては非常に面白くないことだが、実のところこれは日常茶飯事のことでもある。今のところ、こういうことで都子が白星を獲得したことは、七葉が記憶しているうちには無い。

「今日は、屋上でお昼にするのはどうかな。」

という七葉の提案から、三人は屋上で弁当を広げることとなった。朝には少しばかり肌寒かったものの、今となっては少し強くなった陽射しとまだ暖まりきっていないそよ風が相まって、屋上は昼寝には絶好の場所となっていた。

七葉その幸せをかみしめる、もう、けっして戻らない過去を思いながら、せめて今だけはこの幸せに浸っていたかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9539e/>

バリアブル・アート過去編 第一章

2010年10月10日14時01分発行